

# 戦争遺児は喪失した対象をどのように語るのか —父親、義兄を失くした事例のインタビューをもとにして—

How War Orphans Talk about the Object of Loss:  
Based on Interviews of Cases of Loss of Fathers and Brother-in-Laws

佐々木直美  
SASAKI Naomi

山口県立大学大学院 健康福祉学研究科  
Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

## 要約

本研究は、戦後において父親や義兄の不在の経験を持つ戦争遺児5名へのインタビューをもとに、父親や義兄の不在をどう意味づけてきたかについてナラティブの視点から検討した。その検討を通して、喪失に直面した家族や個人のレジリエンスについて考察した。不在や喪失への受容は簡単なものではなく、解決に向けて急速にすすむものでもない。不在と喪失の悲しみや怒りとともに生きることになる。そうしたとき、「父親の役割を、自分や遺された者が受け継ぎながら生活基盤を維持すること」、「家族の中で故人の記憶や故人への思いを共有すること」、「他の家族と分かち合えないことがあっても、故人との特別なつながりがあると感じられることに価値を見出すこと」があることが、遺された者にとって、父親の不在・喪失をともないながら生き続けるためのレジリエンスとなり得ることが考えられた。

## Abstract

This study is based on interviews with five war orphans who experienced the absence of a father or brother-in-law in the postwar period. I examined how surviving family members made sense of the absence of their fathers and brother-in-laws from a narrative perspective. Based on this examination, I discussed family resilience in the face of loss. For bereaved family members, it is not easy to accept the absence or loss of a significant person. However, in order for the survivors to continue to live with the absence or loss of their father, they need to "maintain the foundation of their lives while they and their survivors take on the role of their father," "share memories and feelings for the deceased within the family," and "see the value of feeling a special connection with the deceased even if they cannot share it with other family members. It was considered important to "find value in feeling that there is a special connection with the deceased, even if there are things that cannot be shared with other family members.

キーワード:戦争遺児、ナラティブ、あいまいな喪失、レジリエンス

Key words: war orphans, narrative, ambiguous loss, resilience

## I. 緒言

アジア・太平洋戦争が終わりまもなく80年になる。広島には原爆ドームや原爆資料館、長崎には平和祈念像や原爆資料館、沖縄には摩文仁の丘やひめゆりの塔があり、また各地には護国神社や慰霊碑などがある。そうした建物のみならず、多くの書物によって、当時、日本の地で起きたことや、そこで暮らした人々の記録が残されている。例えば、書籍「涙魂」<sup>1)</sup>は、夫が戦争に赴き、残された妻の手記を集めたものである。

日本には故人を墓に埋葬し、そこに参る文化や習慣があるが、戦没者遺族の手記を集めた「平和の手紙」<sup>2)</sup>の体験には、家族や親戚が戦死し、その遺族が受け取った遺骨箱について、「白木の箱（遺骨箱）の中は遺骨ではなく石ころ」であったことが書かれている。こうした中で、父親が出征することによる父親の不在や喪失によって起こりうる問題はいくつか挙げられる。

1つ目は、白木の箱の中が故人の遺骨や遺髪といったものではなかった場合、家族はそれをどう受けとめたかという問題である。ボス（2015）<sup>3)</sup>によれば、「故人を埋葬するということは人間にとって普遍的に必要とされていることである。埋葬するべき体があること、あるいは遺体に代わる個人を象徴するものの埋葬によって、喪失の解決につながる」、「体が行方不明になっていたりする場合には、死亡や生存の証拠がないため、家族の境界が開かれたままとなり、喪失を解決できないことは正常なことだ」と述べている。このように、白木の箱の中が石ころである場合は、死亡や生存の証拠がないため、重要な家族の喪失の解決をあいまいなものにさせてしまう問題がある。

2つ目は、家族の中心人物の不在という問題である。戦前と戦後では家族関係の在り方に大きな変化がみられた。戦前、戦中の親、とりわけ父親は、子どもに威厳を保ち、命令をし、保護者としての義務を負い、責任を持つといったタテ関係があった（原野、1981）<sup>4)</sup>。しかし戦後は、核家族化、少子化によって家族の人数が減少し、男性優位の夫婦関係から自由で平等な男女の関係が求められるようになり、父親は威厳のある存在から下り、「家長」としての役割が事実上消滅した（田村、1995）<sup>5)</sup>。このように、今でこそ、男女参画の意識が高まっているが、戦時中の家族において父親は、家族の中の中心人物であったといえる。その人物が出征により不在であることは、家族の在り方そのものに大きな影響を与えてしまうという問題がある。

3つ目は、子どもの成長過程における、父親不在による父親像や母親像の形成への影響である。子どもは、

男児であれば父親を、女児であれば母親を同一視し、男児の場合は、父親をモデルとして父親の持つ理想やその根底にある価値観をも取り入れ、内在化する（黒柳ら、1998）<sup>6)</sup>。親子は言葉になる以前の感情で伝えあい、共感や共鳴といった情緒でつながり、家庭生活の日常的交流から信頼が生まれ、同時に子どもの中に「父親像」が作られていく（品川ら、1983）<sup>7)</sup>。このようにして父親がいれば、自然と子どもには父親たるものを取り入れられるが、戦争により父親が不在となった家族の場合は、いかにして父親像を形成するかという問題がある。

4つ目は、父親の不在や喪失について、家族の中でどう向き合っていくのかという問題である。根本（1981）<sup>8)</sup>は、「父親がいなくなった時期がいつかということが一つの分岐点となる。なぜなら十分に父親の行動を観察する機会があり、子どもが父親の行動シユーマを学習してから父親がいなくなった場合には、そのシユーマをモデルとすることが可能であるからである。もっとも父親の記憶が全くない場合でも父親はモデルとなりうる。母親なりその他の者が、どのように立派な父親であったかを話して伝えることは男児にモデルとしての父親を与えることになる」と述べている。戦争において重要な家族が亡くなるということは遺された母親や家族にとって大きな喪失である。ラファエル（1995）<sup>9)</sup>は「災害による人的・物的喪失に影響されずうまく対応していると誤認される者の中には生きることのやり直しとその維持にかかりきりになって今できることに専念しているのであって喪失の本格的なインパクトが現れ悲嘆が表面化するのはまだ後のこと」と述べている。このように、遺された母親や家族の他の成員も悲嘆への向き合いが困難な場合があり、それによって家族中で父親のことについて沈黙してしまう場合もある。このように家庭内で故人を偲び、故人の話をして悲嘆を共有できたかどうかという問題がある。

最後に、父親が不在となったタイミングの問題である。子どもたちが父親の死をどう体験するかは父親が不在となった時の子どもの年齢によっても異なる。子どもが、「生きかえらない」という死の不可逆性、「誰にでも必ず起こる」という普遍性、「誰もが避けられない」という不可避性、といった死の概念を理解できるようになるのは9~10歳前後である（荃津、2012）<sup>10)</sup>。このように父親が早くから出征してしまった場合、子どもは父親の死をどのように捉えたのだろうかという問題である。

このように戦争による父親不在であることによる子どもへの影響は、父親の存在が現代とは異なった意味を持っていたこと、出征した対象の死の事実があいまいなこと、家庭内での故人の悲嘆の共有や、死を理解できる年齢に子どもが達しているかということといった点で、幾重にも折り重なる複雑さを帯びているといえる。

そこで、本論では、戦後において父親や義兄の不在の経験を持つ遺族会会員の経験者の語りをもとに、対象の不在をどう意味づけてきたかについて、ナラティブの視点から検討することを目的とする。

ナラティブ・ストーリーとは、語り手と聞き手の間で生成され「語られたストーリー」であり、インタビューを通して語り手の人生経験の語り方、言語化の仕方、意味づけ方に焦点をあてるものである(山田、2007)<sup>11)</sup>。この視点をもとに、対象者の経験の語り方や意味づけ方から、喪失に向き合う事態において本人の心持ちや周囲の対応について言及する。なお、いずれの事例も遺族会の活動を行っているという点で、喪失対象とともに生きてきたという点は共通しているが、事例の背景が多様であるため、得られた知見を一般化し得るものではない。

戦争によって重要な家族との別れを余儀なくされた経験者について、本論では、戦争遺児とする。遺児とは、デジタル大辞泉によれば「親と死に別れた子」とされている。この点についてインタビュー対象者の中に、父親を亡くした者だけでなく義兄を失くした者もいるため、本論では、父親のみでなく義兄も含むこととする。また、父親の死の事実があいまいである者もいるため、「死に別れた」という限定はせずに検討をすすめる。

## II. 方法

戦争遺児へのインタビューについて、Z県遺族連盟に協力を依頼し、承諾を得た。インタビュー内容は、

半構造化面接で行い、「戦争でお父さんが亡くなったことを知ったときのことを覚えておられる範囲で教えてください」、「あなたが成長する中で、あなたはお父さんの存在をどのように感じてきましたか」、「あなたはお父さんと自分が心理的につながっていると感じることはありますか」を中心に傾聴することとした。なお、対象者の中で、義兄を亡くした方の場合は、「お父さん」の部分をお義兄さんとした。

こうしてZ県遺族連盟の協力のもと、10数名のインタビューへの参加への事前同意が得られていたが、2022年から、他国の関係性の緊張化により、戦争遺児としての経験をインタビューで尋ねるには、世界情勢の影響を少なからず受けてしまうことや思い出したくないことを思い出すなどといったことが起きる可能性を鑑み、それ以降のインタビューは行わなかった。よって、本論では、2022年1月末までに得られた5名の遺児の体験をもとに検討する。対象者には、インタビュー前に研究者側の倫理的配慮に関して伝え、録音の許可をもらい、インタビューは個室で行った。インタビュアーはすべて同一者である。なお、対象者には、本論完成後に内容が対象者本人の意図するところと相違がないかを、本論を提示して確かめた。

倫理的配慮 対象者には、研究の目的および方法、研究参加の任意性と参加撤回・辞退の自由、個人情報の保護、得られたデータの利用範囲と研究成果の公表などを書面で説明し、参加協力の承諾を書面で得た。本研究は山口県立大学生命倫理委員会の承認を得て実施した【承認番号2021-19号】。

## III. 結果

対象となった戦争遺児は、表1のとおりである。インタビューを途中で中断する者はいなかった。インタビュー時間は、平均49.97±31.00分であった。紙面の関係上、語りのすべてを掲載することが出来ないため、

表1 対象者(語り手)の属性

年齢	性別	喪失の対象	喪失対象の亡くなり方	残るもの	喪失対象との交流の記憶	子どもの頃一緒に暮らしていた人物	喪失対象が不在となった時の対象者の年齢	
Aさん	86	男性	父親	戦病死	遺骨	あり	祖父母、母親、本人、妹2人、弟1人、使用人1人	Aさんが9歳の頃、父親は40歳で出征。Aさんが10歳時に戻ってくるが体調がすぐれず入院。Aさんが小学6年生の時に入院先で亡くなる。
Bさん	86	男性	父親	戦死	戦地に赴く前に切った爪	なし	祖父母、母親、本人、妹2人	Bさんが7歳の頃、父親は35歳で出征。
Cさん	80	男性	義兄	戦病死	遺骨	なし	父、母、長男(義兄)、姉、本人、弟	Cさんと義兄とは15歳離れている。義兄は22、23歳の頃に出征し2年後に結核のため戻り入院。Cさんが5歳の時、義兄が24、25歳で入院先で亡くなる。
Dさん	77	女性	父親	戦死	写真	なし	祖父1名、母、母の妹(叔母)4人、本人	父は28歳で出征。Dさんは父の出征後に出生。
Eさん	76	男性	父親	生死不明	写真	なし	母、再婚相手の父(後、離婚)、姉2人、本人	父は35歳で出征。Eさんは父の出征後に出生。Eさんが5歳の時に母が再婚し、20歳の時に離婚。

一部の掲載となる。語られた内容を表すタイトルを【 】で示す。〈〉はインタビューアーの言葉である。

## 1. 父親の記憶あり、遺骨ありのAさん

【「自分がしっかりしないと」という思いと親父が不在であることへのやるせない思い】

〈せっかく戦地から帰ってきてくれたと思ったら、そして、よくなるために入院したと思っていたら、亡くなるとは〉

説明つかんですよね。まあ、いつまでも亡くなったという感覚がなかったですよね。ちょっと兵隊で離れていたし、それから入院で離れていたの、家にずっといない期間があったんでね、ここにいたのが、急に明日いなくなったというのだったら、さみしいなというのがあるだろうけど、そういうの何もなかったですよ。なんか、説明つきませんね（笑い…はあー）、頼るもんがないということが一番でね。なにをどうしていいかわからんし。子どもじゃからね。沈黙（10秒）とにかく自分でしっかりせんやあいけんということを毎日思っていました。亡くなったという感覚がずっとなかったよね。

〈それはお葬式を出してもまだそんな感じが〉

そうですね。

〈なんででしょうね。実際には亡くなっているけど、亡くなっている感じがしないというのは〉

わからんね（笑）。信じられないというか、なんでなんで、というのが先なんでしょね。

〈お父さんが、本当に亡くなったんだというのが分かったのはいつ頃ですか？〉

それはちょっとわからんね。とにかく、2、3年してから、やっぱり、2、3年はせんかな、1年くらいかな、当分ね、半年、1年したらね、これはまてよ、大変なことだと、親父が亡くなったことで、追い打ちをかけるように、じいさまは弱る、相続税はらえ、小作に出していた農地は取り上げられるが一緒にきたからね、ちょっとそのときはまいりましたね。一番その時がつらい時でしたね。

〈そういうとき、いろいろなしわよせを目の当たりにして、ああ、いないんだなということを実感として感じたんでしょうか？〉

そうですね。地区のお祭りや運動会やらがあってもね、親父がいないのはつらいものですよ。

そういうことじゃあよく泣きましたよね。なんでこうなった。親父は40歳を過ぎていたからね、召集令状

が来た時に「えーっ」という感じで。入隊するまで2、3週間あったのかな。その間に屋根の瓦を大急ぎで吹き替えた。いつ帰れるかわからんから。5年10年は屋根が漏らんように。自分も一緒に屋根に上がっていたのを覚えています。

※「父の思い出」を書いた用紙を渡してくださる。そこには父親のたくましい仕事ぶりや、父親から叱られたこと、家族で一緒に出かけたことなどが書かれてあった。

## 【父親不在を埋めるべく、家族成員の役割が多重になる】

〈お母さんを含め家の様子はどうでしたか？戦地にいかれている間は〉

じいさまがわりに元気だったから、家のことはある程度じいさまが人を使ってやってくれたけどね、でもそれも年だったから。おばあちゃんが子どもの面倒見てくれて、年はとっていたけど台所はしてたから。おふくろは、ほとんどお嬢様育ちで、嫁に来て何もせんでいいということで嫁にきたから。親父が出征するまでは母も家のことしてなかったのが、いっぺんに肩にかかってきたからね、おふくろが一番苦労したと思います。自分はいくら頑張ったといえども、中学校、高校にも行ってましたからね。私は毎日、学校から帰ったら、かばん投げて仕事をするし、暗くなるまでは仕事をしてましたからね。

結局、父が亡くなったのが、私が小6の時の2月に亡くなったから、3月で小学校を卒業して、それから中学校のときから、大人の世界に入って、会合とかお寺のつきあいとか出て。学校は、病気で休んだことはなかったけど、家庭の事情で何回か休むことはありました。各家庭で、親父が出ないといけないところがあるから、そういうときは自分が出たので。呑む席も出ましたよ。酒は呑まなかったけど、つきあいをするの。あの時代は家を守らないとというのがありますからね、まあ、その辺はずっと気をはり続けていたから。

## 【親父の思いを引き継ぐ】

母が親父から「子どもを兵隊さんにするんじゃない」って言われたって。それは何回も母は言っていました。親父が亡くなったから弟が学校行くのに学費がある。奨学金があるわけではないし、いろいろな補助金の制度はない。みんな自前で出さないといけないから。弟は「防衛大学に行けば学費はいらないから」って言ったけど、私が反対して。親父がそういうことを言っていたと聞いていたから、結局、弟は防衛大学に



いれなかったんですけどね。「自分がなんとかしてやる」って言って。

結局、妹2人と弟1人は、一応、それなりに学校出して。家からは高校、大学が遠くて通えんから、妹は2人ともF県行きたいというから、F県に出して。全部片付いてから自分が結婚した。子どもの頃から、私のことを家族中が長男だから、大事にしたということはあると思うが、その代わり叱られるのもよく叱られた(笑)。

## 2. 父親の記憶なし、遺骨なしのBさん

### 【親父がいなくなって苦労した母親】

親父は昭和17年に亡くなりましたからね、その2年前くらい、昭和16年くらいに招集がきて、行っている。戦地に行ったのは5歳くらいだと思います。見送った記憶もないんですよ。それで、亡くなったのは自分が小1のとき。親父の記憶がないんです。

<いただいた新聞記事(※Bさんの遺族連盟の活動が掲載された記事を、他の遺児から頂いた)には、戦地に向かう前に切った爪だけが残って書いてありますが、お父さんは遺骨は戻って来なかったんですね>

戻ってこなかったですね。

<なんにも戻ってこなかった?>

はい。そうですね。

<なぜ亡くなったのが分かったのですか?>

やっぱり、役場の方からね、厚生省から来たと思うんですけどね。通知が来ました。

<役場から、手紙のようなものが来たんですか?>

いえ、役場の人が当時、家に尋ねてきたらしいです。あの当時、役場から召集令状が来てましたから。ですから亡くなったのも役所の方から知らせがあったんですよ。

<お父さんが亡くなったということが分かったのはいつ頃ですか?>

小学校1年生ですからね。戦地に行ったことは分からなかったんですけどね、親父がいなくなったのは分かりました。

<知らせを聞いたときのお母さんやおばあちゃんの様子はいかがでしたか?>

よく覚えていないんですけどね、親父は一家の柱だったからね、ショックだったと思いますよ。

<今振り返ってみると、お父さんってBさんにとってどんな存在ですか?>

おふくろが言うには、無口な人でね、百姓やってま

したから、農家やってましたから、あまりおふくろも言わないんですね、親父がいた時の話をね、

<お母さんもおっしゃらなかった…>

親父が亡くなったというより、おふくろが相当苦労したんだということは分かるんですね。

うちは農家やっていたから、戦死したから、あと残っているのは、親父の兄弟が9人いるんですよ。おふくろが全部仕切ってね、じいさんばあさんもいましたけどもね。

<お母さんはどちらかという悲しむ暇がなかった?>

そうですね。そういう姿を見たことないんですけどね。親父が亡くなっておふくろは悲しんだと思いますけどね、子どもには悲しむ姿を見せませんでしたね。

### 【親父がもっていた子どもの将来への思いを母親から聞き受ける】

<お母さんは、Bさんやご家族にあまりお父さんのことを話されなかったんですね>

ないですね。うちは、農家やってましたからね。私は長男で、いずれ農家をやるとみんな思ってたんですよ。親父は戦地行くとき、おふくろに、この子を将来ね、百姓にしなくていいから好きな道に行かせてやりなさいと、言っていたらしいですね。後で、おふくろに聞きましたけどね。(涙ぐむ)

<そうですね。Bさんの中で、お父さんって…>

おふくろを通して、です。親父が亡くなって、こんなにね、おふくろがね、おふくろが相当苦労しましたからね。親父のことは僕は小学校1年生ですからあまり記憶もないしね。

親父のことは、なんで戦争に行って、亡くなったんだろう、という思いです。

## 3. 義兄の記憶なし、遺骨ありのCさん

【義兄が出征先から帰ってきていることを信じて、引き揚げから家族で戻る途中で、親戚から義兄が亡くなっていることを聞く。それを聞いた時の、母の、立ち上がれない姿が忘れられない】

※Cの父親は出征していない。これについて「たぶん年齢的に声がかからなかったんじゃないかな」。

「その頃に、22、23歳だった義兄に赤紙が来た」と語る。

<一緒に暮らされた記憶があるのは?>

義兄、私と姉が2人、弟で5人なんです。で義兄の記憶はほとんどない。5歳で引き揚げてきましたからね、その頃、義兄は東京の大学の高専(筆者注:現在

の大学専門課程)に行っていたので一緒にはいなかったです。父が満州鉄道に行ってから私たちも5歳まではそちらにいたんですね。だから義兄のことは記憶にないんです。でも義兄と手をつないでいる写真はあるんです。それを見ると、ああ、いたんだって。でもぼくの記憶にはない。

<お義兄さんは、日本に戻ってこられたけれども一度もお会いされることなく>

なかったんです。一番ぼくがかわいそうと思うのは母なんです。母は戦争が終わったので引揚者でしょ。途中、川で休んだり、貨物船に乗ったりしながら、両親が私たち4人の手をひいて私の母のふるさとに帰って来る。峠があってやっと集落が見えるところで、もう一息だから休もうということでも休んでたら、親戚の女の人がたまたま通ったんです。そのときのことは、はっきり覚えています。母がその人に「〇〇〇〇(義兄の名前)は元気でしょうか」と聞いたんです。〇〇というのは義兄ですよ。でその親戚が「亡くなっちゃったですよ」という話なんです。自分たちは、引き揚げて帰る途中だから、死亡した通知も来ていない。だから生きて帰ってる、帰ったら義兄がいるよ、と思っていたら、もう一息だということでも、それを聞いて、「えー」ということでも。もう帰るときには、母がもう立てなかったですね。座り込んで。背中にはリュックを背負っているでしょ。あのときの、あのときのね、母の姿はね、忘れられませんね(涙ぐむ)。家に帰ったら、おじいちゃんが柱にもたれて、よう帰ったね、って。「いつ亡くなったかね」って聞いたら、「だいたい前よ」ということを聞いた。前といっても同じ年ですよ。

<一家が帰って来られたときには、もうお義兄さんはお墓に入ってた。>

はい。そうです。遺骨です。

<その後、お母さんとお義兄さんについて話をされることは?>

あの時代ですから、義兄を大学に行かせたというのが母の一つの自慢だったと思うんですね。で、戦争行って、死んだとわからんから。もうこれからは大丈夫だよ。義兄が活着しているときはそんな話はしていましたが、義兄が死んだと分かった後は、母は、思い出したら涙が出るような感じで、話さなかったと思いますね。

**【自分が年をとってきて、国のことで頑張った義兄をほうっておけないと感じる】**

<お義兄さんはどういう存在ですか?手帳にお義兄さんの写真をずっと入れておられるほどというのは>

これはね、遺族会に入りだしてからですよ。若い頃は遺族会は関係ないように思っていたし、大学を出るときもそんな気はなかったんですよ。こちらも年をとって、「まあよ、義兄が病死ではあるけれども戦争で亡くなっているわけだから遺族会やらんといけん」と思ったのが何十年前(筆者注:中年以降)なんです。ぼくがそういう年になってそういうことをやらんといけん年になってきてるんかなと思う。義兄の気持ちね、そんなこと全然気にしなかったけど、義兄は国のことで頑張ったんだけどそれをほっておいてはいけないなと思ったんですよ。

ぼくは小さいから義兄のことは記憶にもないし、こんなふうに義兄と手をつないで軍服みたいな着て写真とってる。でも覚えていない。だけど、義兄を慕う理由は、義兄は努力してね、勉強も頑張って、学校に行ってるね、たくさんストレスがあったと思うけど亡くしてしまったというね、最後死ぬんですけど。それってというのは、ぼくは今は80ですけど、ぼくだったらどう思うかなと思うんですね。当時の義兄の年齢は24、5ですから、父も母もいなくて、戦争に1人で行って、病気になるって1人で亡くなって、父にも母にも連絡できなくて病気になるって1人で亡くなったって、そんな義兄は、しょうがなかったにしても、じっと耐えて。父もすごかったんだけど父の次にすごい人だったんじゃないかなと思うんですね。それに、義兄を頼りにして帰ってきた母、ぼくらはそれにくっついて帰ってきたわけですけど、その時の母のショックの姿ですね。そんなこんなが、ぼくが成長するにしたがって、これは大事なことだなと思ってからの思いですよ。母や義兄のその気持ちはぼくが大事にせんにゃあいけんなど。それはもう心の問題ですよ。自分の思いだけで何もありませんけど。

**【母と義兄の命日が同じであることの縁、つながりを感じる】**

過去帳(筆者注:供養のために死者の法名や死亡年月日などを記す帳簿)はお坊さんが書いてくれて、いつもたたくで仏壇に置いてありますよ。それをばらばらみてたら「あ」と。一番最初に気づいたときは、これは、何かの縁だな。義兄は昭和21年、母は56年の同じ日に亡くなっているでしょ。母は認知症で病院で亡くなったんです。ぼくは亡くなる時は間に合ったんですけどね。「そんなに苦しむんだらおいで

よ」ということじゃないかなと。なかなか同じ日には死ねないと思うんですよ。そういう見えない糸にひっぱられてね。つながっててね。そうなったのかなと思います。

#### 4. 父親の記憶なし、遺骨なしのDさん

##### 【大人の女性たちの中で、不自由なく私は大きくなった】

母と二人で生活したわけではないからね。私は4人の叔母の中で育ったので、大勢いたからね。さみしいとかそんなのはなかったんですね。男の人はおじいちゃんが1人いましたからね。だから、そんな、父親どうのというのとはなかった。母も話さなかった。結婚生活も2年くらいで、短かったからね。父のことについては、叔母たちやいとこは会ったことがあるっていうから、こんな人だったというのは聞いたことあるし、おもちゃの船とか作ってくれたって言ってましたけどね。私としてはイメージが…会ったことないから。私はそういうのがないでしょ。だから聞いてもフーンって感じで。さみしい思いは全然していない。

＜お父さんを感じるような時がなかった＞

そう、おじが木工で人形のベットなんかを作ってくれたこともあった。それ以外は、特になかったよね。子どもが男だったら少しは違ったのかな。私が女の子だから女の中で育って何も不自由なく。

##### 【母親が行っていた遺族会の活動を引き継ぐ】

＜あまり記憶のないお父さんのことでDさんが遺族会の活動をしているのはどうしてですか？＞

母がずっとしていたんです。G地区の副会長とか。はじめ会計やらずっと世話をしていたんです。で、母がいるときに、みんな年をとって出来なくなって、母の次にしていた人がもう80歳になったからって言って、やってくれんかって言われたから、やる人もいないしやってるんです。

＜お母さんは、そういうことをするのがお父さんの供養になると思っておられたんでしょうか？＞

そういう思いはないと思いますよ（笑）。自分が楽しかったんだと思う。外に出ていくのが好きだったから。

##### 【お墓参りは、行くものという感覚】

＜Dさんは、お母さんのしてらした遺族会の仕事を引き継がれて、お父さんがおられるお墓にも今、参っておられますね＞

父の実家はH市の山の上にあるんですよ。そこにお

墓があったから父はそこに帰ってきたんですよ。木箱の中にはなにも入ってなかったのかは分からないけど、遺髪とか入っていたのかな？ぜんぜん母も中に入っているものは知らないと思います。見たことないですから。

＜ああ、じゃあ戦地の土ではなくて？＞

海軍でしたから、沈んだから、何もそれこそ、なかったんですよ、結局。

＜そうでしたか…。お墓参りにはお母さんと2人で？＞

そう。ずっと行ってましたね。10月25日が命日だから、10月25日にはね、行ってました。まだ向こうのおばあちゃんもいらっしゃってね。そこに命日のたびにお墓参りに行ってました。小学校に入る前までは行ってました。

＜イメージで言って申し訳ないんですけど、普段、お父さんのことちょこちょこ話してて、じゃあ命日から行こうかねっていう感じ？＞

そういう感じじゃない。もう命日は行くもの、って感じ。で、途中でこっちに（お墓を）連れて帰って、いつ頃だったかな。母が40を過ぎたころ、父の方のお母さん、私からすればおばあちゃんが亡くなって、長男が亡くなられた時に、父の実家のお墓は遠いから、お墓を分けようということで、こちらにお墓を作ることにしたんです。その時、木箱だから、おそらく木そのものは朽ちてしまってもうなかったと思うんですよ。それで親戚のおじさんが、そこにあった土と結婚式の写真を入れて持ってこられた。それをお墓にいれたんですね。それから命日にはお墓参りに行っていましたね。自分のところのお墓だから行かないといけないという。

##### 【私の息子が、父の慰霊碑を訪ねたり、夫の実家の墓参りをした。今度は自分が先祖を守る番だと思ったのかもかもしれない】

このまえ主人が亡くなったときに、お墓はこちらにあるのに、息子が主人の実家まで行ってお墓参りに行ったというんですよ。その帰りに呉に寄ったって。父は扶桑という船にのってた。その碑が呉にあるんですよ。それを息子が見に行ったって。碑に父の名前が書いてあったって。それまで息子はお墓のことを言ったこともお墓参りに父の実家に行くこともなかったんだけど、主人が亡くなって、男と言うのは家のことや先祖に関心があるのかなと思いました。

＜息子さんにはお父さんのことは？＞

私も父のこと知らないんだから、思い出がないから、



息子には言いようがない。母が扶桑の碑の冊子を持って帰ったときに見せたのかも。それは覚えがないんですけどね。息子がそれを知ってるということはこんなものがあるよって見せたのかもしれない。

<見せたとしたら息子さんが小さいとき？>

いや大人になって。大きくなってから。主人が亡くなって10年。それより後ですからね。2、3年前。

<それを息子さんは覚えてらして？>

うん。やっと長男の自覚が出て来たねって。今まで、法事とかも息子は忙しいって行ったことないのに、今度は自分の番と思ったんでしょうかね。

<自分の番？>

今度は、自分が先祖を守っていかないといけないという。

## 5. 父親の記憶なし、遺骨なしのEさん

**【戦地から父親が男か女か分からない子どもに名前を送り、名付けられる】**

<幼少の頃、どなたと暮らしておられましたか？>

私は変則な遺児でして、20年5月にうまれたんですけど、同時に親父が20年の5月か6月にかけて沖縄戦で、あの一、戦死しています。3度目の招集ということで。19年に広島宇品の宇品から暁という部隊で沖縄の戦地に行ったんですけど、今でしたら男か女の子か分かる時代かもわかりませんが、そのころは沖縄に着いて、戦友にはいろいろな才能をお持ちの方が集まると思うんですよ。それで、戦友の中に字画を見る人がいて、その人に見てもらって、男の子の場合は今の〇〇、女の子の場合はちがう名前を、と。戦地から。軍事郵便で。<お父さんの字で？>

はい。

**【5歳のときにお母さん再婚。実在する親父と写真や仏様の存在との出会い】**

5歳の時に母親が再婚しています。そして私が20歳のときに離婚してるんですよ。5歳の時に再婚した親父を私は本当の親父と思っていたか、わかりませんが、でも本当はちがうんだなという思いは、悪さをすると「仏様の前で謝りなさい」とか、「写真にむかって謝りなさい」ということで、おふくろが泣きながら僕を叱ったのを覚えとるんですけどね。

**【慰霊の言葉を母と考えてからが、写真の存在が本当の親父となった】**

中学2年のときにですね、当時の遺族会の会長から

おふくろに依頼が来て、護国神社の春の大祭のときに、私が慰霊の言葉を読んだんですよ。そのとき「待てよ」と思って。自分の家の堤の裏の土手に行って、なんかこう、「本当の親父は違うんだな」とかですね、親父のことを1人ずっと考え始めましたね。これは決定的だと思いましたね。逃げ場のない、親父は戦争で死んだんだなと。その時が本当の親父に対する思いのスタートかもしれません。

<慰霊の言葉は、どういうふうにして文章を考えたのですか？>

おふくろが、てほどきしてくれた気がします。

<そのときに、お母さんの言葉を通じて、写真につながって、あ、お父さんが別にいるんだということを知った？>

現実には捉えてしまったんですね。それを書くのに、再婚相手がいなくて母親と2人で話をしながら書いた気がしますよ。話すのは仏様の前だけですよ。<そのときに、読む文章を考えている時に、お父さんということを知った？>

痛烈に感じましたね。それまでは半信半疑。こっちもお父さんがいる、こっちもお父さん（再婚相手）がいる。これは本当だったんだな、と思うて、これはどうにもできんことだなと思いました。

<姉弟でお父さんの話をしたのは？>

大きくなってからですね。成人してから。とにかく親父がいるときはとにかく言えなかったんですよ（強い口調）。

<そうですね、言えなかったんですね？>

閉ざされたという感じ。おふくろと僕が二人で仏様や写真の前で叱られたり涙流したりしたのは、二人きりのときのことでしょ。で、（再婚した親父が）ただいまと帰ってきたらもう終わってる。

**【離婚後に周囲から聞く話で親父が、写真から、生きて存在したものへと形が帯びてくる】**

<おうちの中ではお姉さんを含めて、再婚相手がいるからお父さんのことは禁句というか、誰も語らなかったのですか？>

再婚中はまったく母親は、親父のことを語りませんでしたね。別れてから青年団の人から話を聞きました。親父とおふくろは青年団を通じて恋愛をして結婚したらしんですけどね。親父とおふくろを知っている青年団仲間が、私が大きくなってから、青年団仲間から「おまえの親父さん、（Eさんのお母さんに）大変なほれこみようだった」とか。



<そのときどんな感じで聞いていましたか？>

まあ、山の間人がはじめて海の魚をはじめて、めずらしいと思ったらおかしいけど、へーっという感じで聞き入った記憶があります。話の中身は単純だったけど、父親は背の高い人だったとか。へーっ。封切の映画をみるような感じ。こっちも22、23になってますから。実話じゃないところから実話が出てくるような感じ。本当じゃないと思っていたことが本当だったのかということかな。写真では見てるんですよ。でも生活の一端を、親父の生き方を、珍しいというとおかしいけど、初めて知るという、はじめて聞かされたという感じですね。なんていうかな。新鮮な話ですね。写真を通して仏様をとおしてではなくて、「あんたの親父さんと小学校の講堂で」、とかなんでもない話だけど、ふれあった話でしょ、親父と。現実？現実、悲しいとか喜びとかではなくて、それを味わった、そういう言葉じゃなくて、親父と肩がふれあうような話ですよ、相手の人も作り話ではなく、「お前の親父はこうじゃったんじゃ」って。魚でいえば、はじめて魚のなまぐさい感じに出会ったという感じ。

<分かります。そういうお父さんのリアル感、離婚されてはじめてオープンに話ができるようになって、その後はお母さんと姉弟でお父さんのことを話すことは？>

あまりありませんでした。7歳の姉がそういう話をしてくることはあったけど。たったわずかな何秒かの話が、ぼっと親父とふれおうた話が、すごくて、すごくて、新鮮なというとおかしいけど、現実に生きとったんか、と。

<そうですね、現実に生きとったんかと>

そういうことが親父にあったんかと。

**【自分が親父の年を超えるまでは生きているかもしれないと思っていた。遺骨も何も証拠がないから】**

ぼく自身も親父の世代を越したまでは、まだ親父は生きてるかもわからんということも半信半疑ながら思っていましたよ。沖縄のどこかで。遺骨も何もかえってきてないですからね。木箱の中に石ころが入っていることもあるんですけど。ぼくのところでも本当に石ころが入ってたんです。木箱の中に。おふくろに聞いた。離婚したあとで。入っていたよって。

親父のこと、沖縄の人に迷惑かけてないかな、生きてどこかにいないかなと。親父は36で死んだんですけど、ぼくは、親父の年の倍になってますから、生きてるはずがないんですけど、嘘みたいな話だけど、（死

んだという）証拠がないですからね。生きて出てくる人もおられますからね。ここ（遺族連盟）の関係で、新婚旅行のときは報告ということで、沖縄に行っただんです。南方地域で亡くなったかたがたの慰霊碑が摩文仁の丘にあるんです。全国各地の最後の激戦地というか、コロナの時期は行ってないけど、毎年行くんですけど、親父が沖縄の人にお世話になって迷惑かけておらんかなとかですね、防空壕の中で現地の人を痛めたりしなかったらどうかとか、逆になんで親父は死んだのかとか。死んでいるというのはまだ、ピンとこなかったですね。ずっと。どこかで生きてないか、と。一昨年に沖縄に行った時は、摩文仁の丘に行ったときに、親父がここで死んでいるとしたら、目をつぶったら親父が出てくるかもしれないと思って、親父は必ずここを逃げてるんですよ。でも現れなかったですからね、迷信みたいなこと言ってすみませんけどね、ここでは死んでないなと思いましたよ。ぜったいに影法師でも、さっと走っていくはずだと思ったんですけど、現れなかったからここではないなと思いました。本当に、死に生きは、確かめていないから分かりませんよね。

<では、今でもどこかで生きてると思っておられる？>

年が年だから死んではいるとは思いますかね、

<Eさんの中で、ああもう亡くなったなというふうには思っていない部分があるということでしょうか？>

あります。ありますけれども（力強い口調）、もう、ぼくが親父の倍以上生きてますから、もう（強く）、そういうことはないなという気持ちには、この数年前からなっちはいますけど、あれでも分かりませんよね（力強い口調）。死んだ姿を見たとか、遺骨がこうとか、そういうものですよ。

**【親父の歩いた道を歩いて、心の中の親父から自立する】**

年は、前後するかもしれないけど、親父のことがふっきれたのは、何回もふっきれたんかという話になるけど、沖縄で慰霊行進をしたんですよ。糸満小学校から摩文仁の丘まで。成人して結婚して、43か44歳頃かな、行進に歩いたんです。そのときにスコールが来ましてね、ここを親父が歩いて逃げたんかと思ったら涙がでましたよ。でもスコールと共に涙がでて。からっとなって、こういうめめしいことばかり思ってたつまらんと、とその時はちょっとふっきれたように思いました。一緒に歩いてみてね。一緒というか親父が歩いたところを歩いてみてね。遺族会の仲間3人と

行って、遺族会の旗をもつのに、糸満小学校の木の枝を旗さしものにして、これ僕持ちましょうと。2キロくらい歩いたら旗が重たいんですね。兵隊さんというのは重たいものを持ってすごいなど、親父のことも涙がぼろぼろ出たですよ。そうしたらスコールがサーっときて涙なんかんなのか分からないような思い出がありますね。

<何回かふっきれたとおっしゃいましたね。ふっきれるというのはどういう？なにを？その人への思いを断ち切るということでしょうか？>

めめしい気持ちになっちゃあいけんという、親父がどうしとるかなとか親父がおったらなとかそういうことを思うことが少しはなくなる、親父への、哀愁というたらおかしいですけど、親父への、別の意味での、自分の人生を生きる上において、親父がおったらな、親父だったらどうしてくれたかなとかそういうことを思うべきではない、とか、そういう意味のふっきり。おるんですよ。後ろには必ず。見たことのない親父が。おるんですけど、人生の中で、困ったからといって、「親父よ」、とか、「どうしとるかい」、というのではなく、こう、ふれあいをもとめるわけではないけど、自分もいっちょまえになった、父離れた、親父離れができたという意味かもしれません。向こうのほうにいる親父ではあるけど、そういうことは分かったことというかんじで、求めてはいけないし、ということでしょうけど。

**【親父の存在は、もはや遺骨を求めるよりも心の中につながりとしてあるが、生きていてほしかった】**

<さっきの話ですが、沖縄でスコールをあげられたとき、いつまでもお父さんだったらどうかななんて思っていないで、自立せんといけんと思われたわけですが。その後、Eさんが43、44歳以降で、お父さんから離れていくようなことを考えたことがありますか？>

だからといって遺骨を求めようと思いませんし、無理にこれがお父さんよというようなことよりも、やはり心の中でつながり、それがほくにとっては一番大事だと思っています。これがお父さんの形見よとかよりも。

<そうですね>

それは、遺骨や遺品が帰って来るにこしたことはないですが、ほくはそれを求めても、生きたか死んだか分からない時代を何年もとおしましたからね。

<今もそうですね>

心というか、…（沈黙10秒）親父に抱かれたこともない、親父も僕の存在も知らない。遺族会で自己紹介がありますよね、20年にうまれて親父は沖縄で戦死して、男と女の名前をつけて戦死しました、それ以外ないんですよ、思い出が（力強い口調）。だからといって親父が抱いてくれてほくの存在を知って戦地に行った方がよかったかとはわかりませんがね。想像ができませんけどね。むしろ悲しかったかもしれないけど。今思うとすれば、とにかく生きて、…うん、それ以上という涙が出てきますよ。<うん>生きてもらいたかったなあと思って。

**【親父が最後を迎えたであろう沖縄という土地や今を生きる人々に、親父を感じる】**

<強烈なお父さんの力を感じました。今、ご存命かもしれませぬもんね>

そうなんです（強く）。戦地では、昼はじっとして夜は逃げるんですって。あそこの山に集まろうやって言って逃げていくらしいんですけど、昭和20年5月22日は大雨で、親父にとっては最後の日になるんですけど、戦友が、E君（筆者注：Eさんの父親のこと）は来てなかったと言っていたことを、おふくろから聞いたんですけどね、何が正しいのかということ。一遍たどったんですよ、厚生省の戦歴、部隊の行程に従って、『前田の戦い』からこう、ちょうど雨が降った日ですってね、それでバスの中で、「Eさんのお父さんこの辺でしょう」って。「手あわせてください」って言われたから、半信半疑でも手を合わせましたよ。沖縄に行くと、沖縄の人を見ると、他人のようには見えませぬよね、<うん>すごく親しみを感じる。すごく親しみを感じる。<うん>できれば肩をくんで、一緒にね、<うん>たいこやなんや、沖縄の小学生が踊ったりするのも、親父が見ただろうとか、戦争で撃たれておぼろおぼろと落ちるのを見ると親父じゃないとか、海岸とかみると、親父が一生懸命逃げよるのをデーと打ったんじゃないかとかですな、沖縄の景色が出てくるといんなこと思いますよ。若い人が出てくると、この人のお父さんと親父は話をしているんじゃないかとか、それはすごく思いますよ。<そうですね>この風景をみたかなとか。ここ（親父が生まれた町）で親父は育った、生活したというよりも、沖縄で親父は子どもたちの踊りをみたんじゃないかな、舞をみたんじゃないかなというのが強いんですね。

<どうしてどう思うんでしょうね？>

やっぱり沖縄は親父が亡くなったところだからで

しょうね、

<亡くなったところだと思っておられるんですね。>

走り回った、逃げ回った、とか一緒に歓談をした、生活の中にとけこんだとか、俺の親父だから悪いことはしていないと思うんです。

<お父さんが、昔過ごした家よりも、お父さんがそこで話したとか>

自然とふれあったとか、その方がすごく僕、感激するというか、思いが深まるというか、なつかしいというか、味があるというか、なにかこう、濃さ、人間としての匂いがする、なにかね。現実には本当みたいな感じがするというか、なにかこう、沖縄行って沖縄の人を見ると親しみ？本当のような感じ、真実？事実を感じますよ、近いというかね、沖縄という土地にね、近いというか、何もかもが。いいにしてもそうでないにしても、山とかばば一とかやられるときも艦砲射撃で人が出てくるときとか、死体が転がっているときも、今でも親父を探すように見ますよ、リアルなのが出てきますよ、だだ一と撃たれるところがね、まさか親父じゃなかろうとかね。

<それはお父さんであって欲しいですか？それともお父さんでなくてほっとします？>

ほっとします。違う違うって思って。今でもそれは一生懸命見ますよ。死体が転がっていてもね。そういう思いは遺児はみんな一緒だと思いますよ。目をそむくのではなく一生懸命見ますよ。

<それを見るのは>

真実を探そうと思っているのかもしれませんがね。確実なものといえばおかしいですけど。どうしても骨とか遺骨とかしたいとか遺体とか見て、こうよ、ああよと自分でも思ったら納得するでしょうが、見てないから、話はそこですね、やっぱり。でもぼつぼつ死んだらうな、と思って。この年になって。4、5年前まで思ったような気がしますよ。もしかしたらそこ（沖縄）で結婚して子どもでもおったら会ってみたいなあとかですね、浮気とか不倫とかそういうことは飛び越えてね、<うん>会いたいなあとかね。本当にすべがなにもない。お釈迦様のクモの糸はいくつもあるけど、糸もなにもない、現実には。

<これからも沖縄に行きますか？>

行きますよ。

#### IV. 考察

ここでは、まず、戦後において父親や義兄の不在を経験した遺児が対象の不在をどう意味づけてきたかに

ついてナラティブの視点から検討する。

#### 1. 父親と過ごした記憶があり、遺骨があり、喪失が明確であったと考えられるAさん

Aさんは、仕事をする父親の姿や家族で出かけた思い出などを持っている。また戦地から戻ってきた父親にも会っている。そうした点で、父親が存在したことも喪失したことも明確であった。

Aさんの家族は、父親不在の中、父親に関する話をしてきた。また、父親の入隊が決まり、出征する前の短期間で、Aさんは父親と一緒に屋根に上がり瓦を吹き替えている。その後、父親の不在後も、日常生活はまったなしで続いていく。

オリヴィエ（2001）<sup>12)</sup>は、父親不在の子どもの指針となるような男性像（祖父、おじ、母親の恋人）の存在と一緒に暮らすことで、夫婦がいるときのようにグループ引率者がいるような家族像を再現できるという。父親不在の場合、父親に代わる義兄、叔父、祖父、近所の男性、男性教師などが子どもと交流を持つことは、父親の代理モデルとして子どもに影響を与えるため欠くことのできない人的資源といえる（ラム、1981<sup>13)</sup>；岡堂、1981<sup>14)</sup>）。Aさんの場合、父親不在による家族の穴は、すぐに祖父、祖母、母、そしてAさんも学業と並行しつつ仕事という大人の役割を担うなどして埋めてきた。まさに家族全員がそれまでの家庭内での役割を拡充しながら多重役割を引き受けることで日々の対応に追われていた。一方で、子どもの立場に戻った時のAさんにとって、地域のお祭りや運動会で父親がいないということはつらく、「なんでこうなった」とよく泣いたと語っている。大人の世界で周囲が大人の中でふるまうことは「しっかりやらなくては」という意思のもと頑張れるが、子どもの世界では、そばにいていいはずの父親がいないことを実感することとなった。これは楽しいはずのイベントがAさんにとっては、父親がいないことの直面という心の中をえぐられるようなつらい体験であったと考える。

父親が亡くなったという実感は、「祖父が弱ってくる、相続税、農地改革」といった災難が同時に起きた時であった。それにより、Aさんが、祖父から仕事を引き継ぎ、新たな家庭内でのリーダーとなり、新たな家庭内での役割の再構築を果たしていった。また仕事を引き継ぐだけでなく、父親の「子どもを防衛学校に行かせたくない」という思いを引き継ぎ、妹や弟の将来について「自分がなんとかしてやる」と奮闘した。これは、まさに家族の中では父親の姿のようであった



と考えられる。根本（1981）<sup>8)</sup>は、「一時的に父親が不在となる家庭の場合は、男児は出稼ぎに行かない間の父親のたくましい男性的な労働ぶりを終始間近に見ている。こうして男児の中にすでに形成されている父親像は、父親が不在の間、生のモデルとして機能する。男児は明確な意図をもって父親にとって代わろうとする」と述べている。Aさんは、周囲には父親がいても自分にはいないという寂しさや悲しさ、つらさを抱えながらも父親の仕事ぶりや父親の意思を引き継ぎ、妹や弟が結婚するまで見守るという大業を成し遂げた。それを可能にしたのは、家庭内において、再構築した家族とともに、家庭内で父親のことを話し分かち合ったこと、そしてAさん個人内では、父親とともにすごした経験があることと、自身は長男であるからしっかりせねばという思いが関係していたと考えられる。

## 2. 父親が亡くなったという意識は持っているが、父親の遺骨が戻ってきておらず、父親の記憶もないというあいまいな喪失を経験していると考えられるBさんとDさん

Bさんは、家の仕事はAさんと同様に、祖父や叔父、そして母が担っていたようである。父の出征時はBさんは5歳であり、父親の記憶がない。そして家族は、父親の出征後、父親の話をしなかったという。Bさんの中の父親のことといえば、「母が苦勞した姿を見てきた」と「父は母に、『この子の将来は百姓にしなくていいから好きな道に行かせてやりなさい』と言が残した」ということである。

大橋（1851）<sup>15)</sup>は、不在による影響は、子どもにとっての同一視の対象の欠如であるという。大橋は、「発達的には、男児も女児もはじめは同一視の対象としては養育者たる母親を選び、女児の場合はそのまま、男児では5歳頃からその対象を父親に移行させる。よってその時期以後に身近に父親がいないことはその移行が困難となり、母親との同一視が引き続きなされる。そして父親不在の場合、一部の母親は、夫に期待されるはずの役割を自分で背負って立つのが子どものためと考え、母親は子どもにとって母親であると同時に父親であろうとする。このため子どもの目には以前の母親とは違った姿として映る」と述べている。Bさんの母親は長男の嫁であり、出征した父親の兄弟が9人とさらに祖母もいる中で生活をしてきた。そのため、Bさんの母親は、母親役割だけでなく、父親役割も担ってきたことであろう。多くを語らずに悲しみを見せずに働く母親の姿には、つねに父親がいなくなっ

た実感がついてくる。よって、Bさんは、がむしゃらに頑張るしかない母親の苦勞を見るたびに父親がいないことに直面してきたと考えられる。

ここで、Bさんの語りにもられた、出征した父親がわが子に遺した「将来は農家にしなくてもいいから」という言い残しについて考えてみたい。「自分は長男でいずれ農家をやるとみんなが思っていた」と語っているように、長男が家を引き継ぐという家の文化があった時代である。父親がどういう気持ちでそれを話し、またBさんがどう受け取ってきたかということについては、インタビュー内では詳細には語られず、涙だけがにじんでいた。よって、この言葉に込められた思いや受け取ったときの思いは察するのみとなるが、将来の可能性をしぼらず、未来を選べるのだという言葉は、父親から息子への遺しもののように考える。こうした言葉が「あとは家のことを頼んだよ」といったものであれば、将来に向けて決められた家業という道筋以外に目が向けず、その道筋の中で生きることとなっただろう。その道を広げ、たとえ長男であろうとも将来はBさん自身のものだ、という父親の大きな愛情を感じる。

Dさんは、本論の対象者の中で唯一の女性である。家庭内での父親的存在は祖父が果たしており、特に父親不在であることによる不自由さは抱えていなかった。これについてDさんは「私は女の子だから。男の子だったら違っていかかもしれないけど」と語る。このように、父親不在であっても、家族役割を拡充したりDさんもその一部を担うなどの必要がなく、寂しい思いをすることなく、あまり生活そのものが変化しない場合は、表立っては、父親不在であることの問題は表面化せず適応しているように見える。そうした中でも、Dさんは、母親とともに、幼少の頃から遠方に父親の墓があった時から命日の墓参りは欠かさず続けてきた。また母がしていた遺族会も「他に引き受ける人がいない」といった受け身的態度ではあるが、引き継いでいる。出征した父親は海軍であったため、墓に納めている箱の中身が遺品や遺骨という故人のものでなかったとしても、墓参りを続けている。このことについて、Dさんは父親に対する情緒に基づいた行動というよりは「命日は参るもの」という当たり前の意識のもと行動している。こうした、墓に参ること、遺族会の活動が続けることは、母親の価値観と行動をモデルとして取り入れているものである。そしてその意識と行動は、Dさんの息子にもしっかりと引き継がれていた。そうした息子の姿を「やっと長男の自覚が出

て来たねって。今までは、法事とかも息子は忙しいって行ったことないのに、今度は自分の番と思ったんでしょうかね。」と語られた。そこには、父親から命を受け「自分の番」を全うし、次の代に命を託す先祖とのつながりを大切にすることDさんと息子の姿があり、母親から受け継いだ文化の継承があると考えられる。

### 3. 義兄が亡くなったという意識は持っており、戦病死であるため遺骨があり、義兄の記憶もないという喪失を経験しているCさん

Cさんは、本論の対象者の中で唯一、父親ではなく義兄を失くした。当時幼少だったCさんにとって義兄の記憶はない。そこに義兄と手をつないだ写真があるだけである。母親や誰かに義兄の弔いを頼まれたわけでもない。しかも父親もいる。しかしCさんは「家族で引き揚げてくる途中で義兄が亡くなったことを知り、ショックで立ち上がれない母の姿が忘れられないこと」と「母と義兄の命日が同じであること」と、「24、25歳で一人で戦地に赴き一人で病気になり一人で亡くなった義兄の気持ちを考えたときに義兄を大事にせねばという思い」を持っている。そうした気づきは、若い頃には思いもせず、Cさんが大学を卒業した後、ある程度の年齢になってから向けられはじめたものだ。青年期の頃の大学時代には「そんなことは考えたことがなかった」と述べており、その頃は、自分中心の考え方や自分らしさの探求にいとまがなかったのであろう。そして、中年期に入り、両親が老いてきて、自身も周りが見えるようになってきて、義兄が失くなった年齢を自分が超えてきた、自分も年をとってきたという時に、改めて母親や義兄の人生が、目の前に現れてきたのかもしれない。「一人で戦争に行き、父にも母にも連絡できなくて、一人で帰ってきて、一人で亡くなった」という義兄について「しょうがなかったとしてもじっと耐えていてすごい人」と語っているが、その義兄の寂しさ、無念さを感じ取り、「大事にしなくては」という思いにつながっているのではないかと考えられる。このように、遺された者にとって喪失に向き合うタイミングは何年もかかってからやってくる場合もあることがわかる。「時が解決する」という考え方もあるが、「時が経ってはじめて、当時起きたことや災害に遭った者の心情がわかる」という考え方もある。

### 4. 父親が「戦死した」と語る一方で、そこにまだ確証のなさ、あいまいさを抱えているEさん

あいまいな喪失は、愛する人が亡くなっているのか生きていいのか、あるいは存在しているのか不在なのかということが不明確な喪失の状態と定義される(ボス、2005)<sup>3)</sup>。そして「故人を埋葬するということは人間にとって普遍的に必要なとされていることである。埋葬すべき体があること、あるいは遺体に代わる個人を象徴するものの埋葬によって、喪失の解決につながる」とされる。Eさんは父親の埋葬を経験していない。そうした父親の生死について、インタビューの冒頭では「沖縄戦で、あの一、戦死しています」と語り、インタビューの最中には「親父に抱かれたこともない、親父も僕の存在も知らない。遺族会で自己紹介がありますよね。20年に生まれて親父は沖縄で戦死して、男と女の名前をつけて戦死しました。それ以外ないんですよ、思い出が」と語っている。このように言葉に出すと「父親は戦死した」という表現であるが、語りを聞いていると、心の中では「年が年なのでさすがにもう亡くなっただろう」という思いと「でも遺骨も遺体も見えない。証拠がない」という思いが併存していることが伝わってくる。

Eさんには、父親が二人いた。一人は、母親の再婚相手としての父親であり、一緒に暮らし、関わりもしていた。もう一人は「写真の父親」であり、叱られたときに謝罪をさせられる不思議な対象だったが、慰霊の言葉を読んだ時から、「写真の父親」が誰なのかを理解している。そのときの体験を「痛烈に感じましたね。それまでは半信半疑。こっちもお父さんがいる。こっちもお父さん(再婚相手)がいる。これは本当だったんだな、と思うて、これはどうにもできんことだなと思いました」と語っている。再婚相手がいる間は、写真の父親のことは禁句であり、Eさんが20歳を過ぎて離婚するまで「閉ざされた感じ」で、父親への思いは蓋をされていた。しかし、母親と再婚相手の離婚を経て、蓋がオープンになり、父親の友人から、「お前のおふくろに惚れたお父さん」「背の高いお父さん」といった話を聞くことで、写真の中の父のイメージが肉付けされ、「親父と肩がふれあうような」「なまぐさい感じに出会った感じ」という言葉に表されているように、写真の父親に命が吹き込まれ、Eさんの心の中で動き出した。ボス(2015)<sup>3)</sup>は、「愛着対象であるその存在が物理的あるいは心理的にないとしても、表象として心の中に位置づけることで、その人と対話し、そこから慰めや励ましを得ることができる。こうした表象としての存在も、心の家族である。想像上のものであり思い起こすことによるのみ得ら

れるものである温かさと支えを提供してくれる心の家族は、人の心と感情の中に住み、困難な時を乗り越えることを助けてくれる」と述べている。Eさんの心の中で、心の家族として父親は布置され、なにかれとEさんの相談相手となっていたことが語りからも分かる。そしてそうした父親にすがり続けず、「ふっきり」という、ほど良い距離をとる自立の経験もしている。聞き手としてそうした語りを聞いていると、インタヴューアはEさんが心の中の父親と実に豊かな交流をしているように感じられた。

ボス (2015)<sup>3)</sup> は、「埋葬すべき遺体があることは死の明確な証拠であり、それがいない場合、家族を支える儀式が何も存在しない」と述べている。そうした遺体や遺品のみならず、父の友人から「当日はE君（筆者注：Eさんの父親）は来ていなかった」と母づてに聞いたことや、「摩文仁の丘で父が死んでいるなら影法師となって現れてくれるだろうが、現れてくれなかった」という経験が、父親が亡くなったことへの納得できなさに由来するであろう。しかし「でも父親も年齢が年齢だし、ほつほつ死んだだろうな」という現実認識に基づく語りもあり、「遺骨や形見を求めたいのではない」「父親と自分の心のつながりを大事に感じる」と自分の思いを整理して語られもした。そして、インタビューの終わりは、「沖縄の土地や、人を見ると真実を感じる」「真実を探そうと思っているのかもしれませんが」という言葉であった。「真実」とは「うそ偽りのないこと。本当のこと。また、そのさま」であり、「事実」は、実際に起こった事柄や出来事である（デジタル大辞泉）。Eさんは、沖縄の土地や人に対して真実を感じると語る。土地というものは、形は変われどもほぼ永遠にそこに存在するものである。そこに陽の光が当たり、雨が降り、花が咲き、命が巡る。Eさんの父親が沖縄にいた時でも、Eさんが沖縄の地に身を置いた時でも、いつでも沖縄の土地や風景は変わらず存在した。そして、父親が話したかもしれない人の子どもや孫が存在する。そのように考えると、Eさんが沖縄への思い入れは、父親が見たであろう景色を見て、吸ったであろう空気を吸うという父親の姿をたどりつつ、地の人と話すことは、Eさんと父親とのつながりを想起させる。やまだ (2005)<sup>16)</sup> は、「人間の生も死にそれぞれで存在するというよりは、場所の中に入れ子のように埋め込まれているのかもしれない。人間がいなくなっても、人間が造った墓場や建造物がなくなっても、場所は残る。場所の方が根元的な存在である。永遠に少しでも近づけようとする堅固な

墓石も、墓碑銘も、いつかは崩れ落ちる。墓地の究極の形は土地であり風景だろう」と述べている。喪失の対象は姿や形は見えなくても、そこにある土地はずっとその人を受け入れてくれるものといえる。そういう点でいえば、Eさんにとって沖縄は父でもあるのだろう。一方で、その地で亡くなったことを思うと、その土地を苦しいものとして感じられるかもしれない人もいるであろう。ボス (2015)<sup>3)</sup> は、あいまいな喪失に直面したときのレジリエンスの一つは「ある行方不明の兵士の母親が『息子は死んでしまいました。でもまだ生きていられるかもしれないし、いつか帰ってくるかもしれない』という心の中に二つの相反する考えを持ちながら、あいまいさとともに健康に生きることだ」と述べている。Eさんは、さまざまな未解決の感情を持ちながら、父親に贈られた名前のついた自分自身を今、生きている。

## 5. 本論から見えてくる喪失に直面した家族や個人のレジリエンス

本論では、戦争で重要な家族を失ったという喪失体験において、重要な家族を失った経験のある5名の語りから、父親についていかに意味づけしてきたかを検討した。対象者の経験の意味づけ方から、喪失に直面した家族や個人のレジリエンスについて言及する。

1つ目は、父親の不在を埋める他の家族の存在があるということである。Cさんを除く全員が、父親の不在に対してそれぞれが役割を拡充し日々の生活が滞らないようにつとめていた。例えば、Aさんの語りによれば、再構成された家族は、Aさんのように父親不在の後、家族のリーダーを務めた祖父が弱ったり、農地改革など現実的に対応せねばならない問題が起きた時に揺らいでしまうが、そうした祖父の代わりに新しい家族のリーダーとなったのがAさんであった。そうした移行には、祖父とともに家の仕事に取り組んできたことに加え、父親の出征前に、父親と一緒に屋根に上ったり、父親とともに出かけるなどして父親が家長としてどう振舞ったかをそばで見ることができたことも支えとなったと考えられる。Aさんが家庭内でのリーダーとなることは、大きな責任を背負うことでもあったが、父親から祖父、祖父からAさんへと役割がスライドしていく過程の中で、家族全員が年をとり成長し、Aさんだけでなく小さかった妹や弟をも、祖父やAさんの姿を見て成長していったことも大きい。このように家族が父親不在とともに生き、家庭内での責任や役割を変化させながら生活基盤を維持し、年を重



ねていくことも家族のレジリエンスであると考えられる。

2つ目は、不在の父親と遺された自分（家族）とのつながりを感じることができることである。家族の中で、故人の記憶や故人への思いを共有したり、家族や信頼できる人々との間で故人について語りあうことがそれを可能にする。本論では、Aさんの父親がAさんの弟たちの将来を案じたこと、Bさんの父親が、Bさんの将来を案じて母親に伝えていたこと、Dさんの母親が墓参りを続けたり遺族会の活動を受け継いでいったこと、またEさんが心の中の父親に「親父、どないかいの」と相談したり、対話していたことなどがそれにあたる。ラファエル(1995)<sup>9)</sup>は、「死別その他の喪失の事情を適当に感情を解除しながら『トーキングスルー（体験したことを具体的に言葉で表して、他者が理解できるように自我を外面化すること）』することは喪失体験の克服と同化・統合に役立つだろう。それは、葬儀その他の公式な儀式にも同じ効果があり、公的な調査や私的な情報収集も喪失体験に意味づけをし、認識面からの克服への一助となろう」と述べている。戦争の場合、家庭内の全員が大きな傷つきを持っているため、なかなか「語る」ことは難しいかもしれない。しかし、語れないまでも、ともに涙する、いたわりあうといったことでも十分であると考えられる。

3つ目は、Eさんの「遺骨や遺体ではなく、沖縄の地や人が真実である」という言葉にあるように、必ずしも、故人そのものやそれにまつわるものがなくても、故人が過ごした場所、故人が見た風景も故人そのものになり得るということである。この感覚は、個人特有の感覚でもあるため、もしかしたら他の家族とは共有できないかもしれない。しかし、個人にとって意味があると感じられる特別なつながりは、その個人にとって真実にほかならない。白木の箱の中が何かに関わらず、命日にはお墓参りをすること、故人を思い浮かべること、手を合わせることなど一つ一つが家族とつながることができる重要な行為であると考えられる。

不在や喪失への受容は簡単なものではなく、解決に向けて急速にすすむものでもない。不在と喪失の悲しみや怒りとともに生きることになる。そうしたときに、これまで述べてきたような「父親の役割を、自分や遺された者が受け継ぎながら生活基盤を維持すること」、「家族の中で故人の記憶や故人への思いを共有すること」、「他の家族と分かち合えないことがあっても、故人との特別なつながりがあると感じられることに価値を見出すこと」が、父親の不在・喪失をとめないな

がら生き続けるためのレジリエンスとなり得るのではないかと考えられる。

最後に、家族や個人のレジリエンスに影響すると考えられる周囲の意識や行動のあり方について言及する。

Aさんのように、父親がいないことの実感は、周りに父親がいる中で、自分にはいないという、不在への直面であった。「不在」であることがマイノリティであれば、「在」との違いが明確になり、重要な家族の喪失の悲しみに加え、今起きている「なぜこのようなことに」といった不条理さに対して怒りに似た感情も引き起こしてしまうと考えられる。喪失経験者が喪失を言葉にしなければ、周囲がその事実気づかないこともある。よって、周囲の意識や行動のあり方の一つとして、人はマジョリティに意識が向きやすいことを理解し(北村、2018)<sup>17)</sup>、マイノリティの存在に意識を向けておくことが重要であると考えられる。

2つ目は、喪失への思いは、すぐ直後に起きるとは限らず、Cさんのように、自身が義兄の年齢を超えたときに、すなわち何十年もたってから、静かに起きることもあるということである。Eさんのように言葉では「あの一、戦死しています」と語られる場合でも、「戦死している」と言い切ることへの抵抗が「あの一」の部分に含まれているように思う。その点では、喪失の受容は、期間が区切れるものではなく、Cさんのように喪失体験を受けた時の年齢が小さかったり、Eさんのように長いこと蓋がされていたりした場合、数十年近く経って蓋が開く機会を得る場合もある。このように、悲嘆を抱えられるまで心が熟達するタイミングや悲嘆に向き合えるタイミングが個人で異なるため、悲嘆が表に現れないからといって「悲嘆はないもの」「解決したもの」と思わずに、悲嘆の受け入れの門戸を開いておく必要があると考えられる。

**利益相反：なし**

**注：**

対象者が語りの中で用いられている地名については、対象者の居住地に関するものはアルファベット表記とした。

本研究は、山口県立大学学術推進共同体の研究助成を受けて実施したものである。

**謝辞：**

インタビューに協力して下さったZ県遺族連盟の皆様にご心より御礼申し上げます。

**引用文献**

1. 山口県遺族連盟：涙魂—戦没者妻の手記—、山口県遺族連盟婦人部、山口、1982
2. 平和を願い戦争に反対する戦没者遺族の会編：平和からの手紙—戦没者遺族の手記—、新日本出版社、東京、1990
3. ポーリン・ボス（監訳）中島聡美・石井千賀子：あいまいな喪失とトラウマからの回復—家族とコミュニティのレジリエンス—、誠信書房、東京、2015
4. 原野広太郎：第1章 子どもにとっての父親—親は子どもの友だちになりうるか—、（編著）桂 広介・長島貞夫・真仁田 昭・原野広太郎、父親の役割 家庭教育選集第5巻、金子書房、東京、36-47、1981
5. 田村 毅：いまこんな父親が求められている—臨床事例に見る父親の役割、児童心理、49(18)、43-52、1995
6. 黒柳晴夫・山本正和・若尾祐司：父親と家族—父性を問う—、早稲田大学出版部、東京、1998
7. 品川不二郎・品川孝子・昌子武司：父親と娘・父親と息子、親と子の関係心理、あすなろ書房、東京、1983
8. 根本橋夫：第2章 父親の役割—モデルとしての父親—、（編著）桂 広介・長島貞夫・真仁田昭・原野広太郎、父親の役割 家庭教育選集第5巻、金子書房、東京、89-100、1981
9. ビヴァリー・ラファエル（訳）石丸正：災害の襲うとき—カタストロフィの精神医学—、みすず書房、東京、1995
10. 荃津智子：第4章 子どものグリーフケア、（編著）高橋聡美、グリーフケア—死別による悲嘆の援助—、メジカルフレンド社、東京、155-187、2012
11. 山田 洋子：質的研究における対話的モデル構成法—多重の現実、ナラティブ・テキスト、対話的省察性、質的心理学研究、6、174-194、2007
12. クリスティアーヌ・オリヴィエ（訳）宇田川悟：父親はなぜ必要なのか？、小学館、東京、2001
13. マイケル・E・ラム（編著）久米稔・服部広子・小関賢・三島正英：父親の役割—乳幼児発達とのかかわり—、家政教育社、東京、1981
14. 岡堂哲雄：第1章 子どもにとっての父親—父親のいない子の心理と指導父親の役割—、（編著）桂 広介・長島貞夫・真仁田 昭・原野広太郎、父親の役割 家庭教育選集第5巻、金子書房、48-60、1981
15. 大橋正夫：第2章 父親の役割—子どもの人格形成と父親—、（編著）桂 広介・長島貞夫・真仁田 昭・原野広太郎、父親の役割 家庭教育選集第5巻、金子書房、76-88、1981
16. やまだ ようこ：家族ライフストーリーが語られる場所としての墓地、質的心理学研究、4 (1)、93-114、2005
17. 北村英哉：第4章 集団間情動とその淵源、（編著）北村英哉・唐沢穰：偏見や差別はなぜ起こる？—心理メカニズムの解明と現象の分析—、ちとせプレス、東京、55-72、2018